2022年度
会報

東京大学大学院 総合文化研究科
言語情報科学専攻
言語態研究会
第1号

第 1 回　会報　「液（えき）／態（たい）」開催報告

（企画：言語態研究会　運営委員）

言語態研究会は、2022 年 9 月 5 日（月）に、第 1 回研究交流会（「液/態」）を実施しました。ご多忙のなか、本イベントにご参加くださった皆さん、誠にありがとうございました。運営委員では、このイベント開催記録といたしまして、開催報告をまとめ、会報として発行することといたしました。こちらの会報が、研究会の会員同士の知の交流を広げ、活発に活動を展開していくことに少しでも役立てばと思います。

1. イベント趣旨

本イベントは、東京大学大学院総合文化研究科言語態研究会により企画され、学生の研究交流を目的に開催されました。本会は、2019 年に言語態 18 号を発行して以後、一時休止しておりましたが、昨年、会員への意見聴取を経て体制再整備にあたり、再始動しました。本年度は研究会の活発化を目的として学生会員同士が互いの研究内容やテーマを知り合う契機となるようなイベントを開催する運びとなりました。

第 1 回のイベントは、「液／態」というテーマを掲げました。「液／態」と書いて、「えきたい」と読ませます。読みからもわかるように、そこには一つに「液体」の意味が込められています。文学など言語芸術のなかに表出される「液」は、たとえば湖や温泉といった場所性、あるいは体液（汗・血液・精液）などの身体性など様々な問題系に気づかせてくれるものでもあります。

ただし、上記の「液体」というテーマだけでは発表者の自由度が低くなってしまうことが懸念され、研究会の主要な一字ともなっている「態」という字を加えることで幅を広げました。当日は、発表者それぞれの研究における「液」の様相を提示していただくことを通して、参加者を巻き込んで、企画者の当初の思惑や関心を超える角度から「液」に関して議論することができ、非常に意義のあるものとなりました。「液」の「態」（すがた）に迫ることを通して、間接的にも「ことばのすがた」あるいは「たたずまい」に向き合うことができたイベントだったと思います。

第 1 回会報では、各発表者、コメンテーター、参加者、運営委員より頂いたコメントを共有し、ささやかながら、第 1 回イベント開催の報告をいたしたく存じます。

2. イベントプログラム

開会 14:00-14:05　（秋山崚悟）

発表（1）14:05-14:25　『名づけえぬもの』における人称・数・態（川島知也）

発表（2）14:30-14:50　関係性の修復に向かって――『あまりに野蛮な』における応答と連帯のネットワーク（魏韻典）

発表（3）14:55-15:15　非人称という態――モーリス・ブランショを中心に（中田崚太郎）

休憩 15:15-15:20

コメンテーターによる発表総括・講評　15:20-15:35　（福島亮）

自由討議・意見交流 15:35-15:55　（質疑取りまとめ・ファシリテーション：岡本佳奈）

閉会 15:55-16:00　（西脇智也）

司会進行　安藤史帆

3. 各発表者情報・発表内容・発表後所感

――発表（1） 14:05-14:25

『名づけえぬもの』における人称・数・態

川島知也／言語情報科学専攻博士課程二年

Key word: サミュエル・ベケット，『名づけえぬもの』，語る主体，否定性，エミール・バンヴェニスト
発表者の専門分野・研究テーマ: サミュエル・ベケット

発表内容

本発表では、液／態という研究交流会のテーマを軸に、サミュエル・ベケットの小説『名づけえぬもの』における〈わたし〉の諸相について検討した。言語的な意味における「態」の観点からは、語る〈わたし〉も語られたものでしかありえない、というベケットの小説に特有の循環を確認した。また、すがた・かたちとしての「態」の観点からは、語る主体のコンテクストとしての身体を構築しようとし、失敗する語りの様相を分析した。最後に「液」については、〈わたし〉の流す涙の流動性を、『名づけえぬもの』のテクストが指し示す言語の恣意性に結び付けて論じた。

言語において語られるものは不在であり、またそれゆえに、その在り様は恣意的である。そうした意味で、言語における不在性は、描写における恣意性に結び付く。『名づけえぬもの』の言葉は、そうした恣意のなかで書かれているといえる。『名づけえぬもの』における身体の描写は、〈わたし〉の身体を構築するのではなく、むしろ、描写がはらむ恣意性それ自体を明るみにだす。いわば、『名づけえぬもの』の言葉は自らにおいて言葉の恣意を開く。語られる〈わたし〉の身体は、言葉の恣意のなかで――涙とともに――溶解していく。〈わたし〉の涙は、つたいゆく身体を――涙にぬれる眼球のように――球体に変えていく。このとき、身体を流れゆく〈わたし〉の涙は、言葉の恣意をめぐる生成のイメージに結び付いているといえるだろう。

発表者所見

液／態というテーマから改めて作品に向き合うことで、みずからの関心だけでは見いだしえなかった新たな発見をすることができました。また、異なる領域に属するそれぞれの発表のあいだに、ゆるやかなつながりが浮かんでくるような体験も新鮮でした。そして、なにより、研究交流会をとおしていただいた数々の貴重なご意見を、今後の研究に活かしていきたいと思います。

――発表（2） 14:30-14:50

関係性の修復に向かって――『あまりに野蛮な』における応答と連帯のネットワーク

魏韻典／言語情報科学博士課程一年

Key word: 津島佑子，『あまりに野蛮な』，ポストコロニアリズム，和解，傷の分有
発表者の専門分野・研究テーマ:日本文学、台湾文学、フェミニズム

発表内容

本発表では、『あまりに野蛮な』を取り上げ、物語に描出された様々なネットワークを提示し、そこに潜在する多様な応答関係を明らかにした。とりわけ、物語に描出された、主体から浸出したり、主体に滲入したりする声、涙を手がかりにし、他者の介入によって修復され可能になった応答関係、和解と共生の可能性について考察した。

具体的には、宗主国女性ミーチャと本島人女性メイメイとの関係性の変容を辿ることで、『あまりに野蛮な』に描出された、植民地支配による差別の構造に傷つけられ、悼まれない生として規定されてきた本島人女性との関係性の修復、苦痛の分有、責任＝応答可能性を明らかにした。

発表者所見

私の発表では、宗主国の女性と植民地女性の身体の境界線に浸出したり、傾れ込んだりする「涙」という「液体」を通して、植民地主義の線引きによる「価値のある生と価値のない生とを分かつ暗黙の解釈体系」によって分断されている存在の、連帯と共生の可能性を提示することを試みた。

私以外の発表からは、異なる立ち位置にある者同士の繋がりを実感することができた。政治的な問いかけに主眼を置く私の発表と、非人称性というテーマをめぐる哲学的な考察、または主体の不在と小説形式との関わりについての議論とは、当初、「液体」という媒体によってしか結ぶことができないものだと考えていた。

しかし、他の発表を聞いて、身体の境界線の消失、主体の解体、主体の弱さといった主題が、全ての発表に通底していることに驚いた。それらはいずれも、リベラリズムや新自由主義が推奨するリベラルな主体概念に異議を申し立て、そこに零れ落ちる情動や存在に目を凝らすものであろう。

文学研究とは、言葉によって紡ぎ上げられる世界に身を潜めながら、オルタナティブな世界の有り様を手さぐるものではないかと、私は常に考えている。それゆえに、文学を研究する学生との交わりが薄く、自分はまるで閉鎖的な言葉の世界に閉じ込められるように感じている。だからこそ、世界の不正に抵抗するために集結し、緊密的な関係性を築くアクティヴィストらの連帯関係に憧れている。そのため、「液体」というテーマで、それぞれの研究が交差することを通して、新たな共通性が見出されたことこそが、私にとっての幸せな経験だった。

——発表（3） 14:55-15:15

非人称という態——モーリス・ブランショを中心に

中田崚太郎／言語情報科学専攻修士課程二年

Key word: モーリス・ブランショ，ブリス・パラン，文学言語，非人称性

発表者の専門分野・研究テーマ: フランス現代思想、モーリス・ブランショ

発表内容

発表では、私の研究対象であるモーリス・ブランショの思想を、今回のテーマ「液/態」を導きの糸にして整理し、「非人称（的なもの）」をめぐる彼の思索を紹介した。

まず『文学空間』（1955 年）において文学言語の存在論的身分が、非人称的なもの＝「イリヤ」として位置づけられていることを確認した。そしてそのような主体性を脅かす非人称性というブランショの主題の源

泉として、ブリス・パラン論（『踏みはずし』（1943 年））と初の長編小説『謎のトマ』（1941 年）を読解した。前者では言語、そして言葉によって表出される人間の内面が「非人称的なもの」として位置づけられ、後者では「海」「闇」といった環境によって主体が脅かされるさまが描写されていた。そして最後に、そのような主体を脅かす非人称性を人間の有限性として解釈し、フーコーおよびハイデガーの議論との接続を図った。

発表者所見

2022 年 3 月 17 日に届いた発表依頼のメールで、「発表テーマ」は以下のように記されていた。

「液／態（えきたい）」（例：体液、水、言語態の態とは？など）

テーマを補足説明する具体例というものは通常、蛇足の観を呈することもあるが、ここではテーマの造語の突飛さ、その謎めいた抽象性ゆえに必要不可欠となっている。そして体液、水、言語、これら三つの並列を見れば、直感することができる。言葉遊びのレベルをはるかに超えた知的豊穣の源泉がこのテーマのなかに存在しているということを。

人間の体内環境を流れ生命を維持している体液はもともと外部の環境を流れる水であったのであり、「血肉」となった言語も「この私」とは無関係にすでに世界にあったものである。それゆえ、通常、内部（私＝主体）と外部（他者＝環境）の境界が維持され、自己の同一性が安定的に保たれているように見えていても、ある時、その脆弱性、虚構性が露呈する瞬間が訪れる。「安全神話」が崩壊する災厄的な瞬間。私＝主体の統御を完全に超えたレベルで、私＝主体を常に条件づけているもの、その超越性が剥き出しになり、その裏面としての人間の有限性があらわになる瞬間、こうした限界的な瞬間こそ、ブランショとその同時代人たちが思考したものではなかったか。

彼はそのような瞬間を、私つまり「一人称」の場を占める主体が「非人称（的なもの）」の脅威に晒される状態として描き出した。「非人称的なもの」の項に入るものは言語だけでなく、文字通りの環境としての「海」「闇」や、主体の限界概念としての「死」などもある。むしろ、言語の問題を人間の生存の水準における切迫した問いとして思考したことがブランショの思想の特異性のひとつだと言えるだろう。

以上のように「液/態」によって導かれた結果、私は発表では、「非人称（的なもの）」を人間の生存を構成する条件として提示することになった。またその過程で、テーマの「液」という語に「夜」を幻視したことで、『トマ』の冒頭の「海」と「闇」の形象を結びつけるインスピレーションを得た。そして３人の発表者が概ね「主体の解体」という方向で話を進めたのに対して、コメンテーターの福島氏からはその解体の後に何がくるのかという質問をいただくなど、有益な助言を多数頂戴した。ここに感謝の念を記したい。最後に、卓抜なテーマ設定から円滑な進行まで、貴重な機会を作っていただいた運営委員の皆さんには大変お世話になった。深くお礼申し上げる。

――コメンテーター　15:20-15:35

福島亮／言語情報科学専攻博士課程

コメンテーターの専門分野・研究テーマ： フランス語圏文学、カリブ海地域の文化と歴史、アフリカ系作家のテクスト

「揺れの後に」

第１回目の研究会は、「液／態」という不思議な主題をめぐるものだった。個々の発表内容については発表者の報告にゆずるが、３つの発表は、それぞれ主体と客体の揺らぎを論じる精緻なものであった。以下に記すのは、それらの発表に触発されて私が抱いた問いである。すなわち、この揺れの後に顕れるものは何か、という問いだ。この問いについて、３つの発表にはさらなる発展の余地があるように思われた。

唐突ではあるが、発表を聞きながら、山口昌男のある文章を想起した。「失われた世界の復権」（1969年）という論攷である。山口昌男はこの文章において、「未開」と呼ばれる世界を、自他の区別が曖昧な両性具有的な世界、「ふたたび見出された原初の統一の象徴的イマージュ」の世界として位置付けている。この「原初の統一」は、程度の差はあれ今回の３つの発表が触れているものだった（例えばそれはベケットにおける「球体」だったり、ブランショにおける「夜と海」だったり、津島佑子における「生者と死者の交通」であったりする）。山口はこのような「自他の区別が曖昧」な世界をめぐって、「少しわれわれの歴史の裏側をのぞいて見れば、想像力のそして民俗の世界では、われわれは常に狂って来たのであり、その狂いがわれわれに全体性を回復させ人間に統一性を賦与して来たものであることを誰が否定出来るであろうか」と続ける（『山口昌男コレクション』ちくま学芸文庫、215頁）。

「液／態」というテーマは、「われわれの歴史の裏側」へと通じている。言い換えるならば、単なる主客の転倒や不明瞭化、あるいは揺らぎにとどまらず、その揺らぎによって見えてくる「裏側」まで問いの射程に含み込んだ、底知れないテーマである。この底知れなさを思う時、先の山口の論攷のタイトルに「失われた」という文字があることは示唆的だ。「現代」と呼ばれる時間が醸成されるなかで失われたものは何か。別言するなら、透過膜にはじかれ――「液／態」という言葉に含まれるスラッシュ「／」もまたある種の膜ではないか？――、「知」の埒外に置かれてきたものは何か。さらなる発展の余地、と先に述べたのは、「液／態」というテーマから導かれうるこのような問いを意識してのことである。

カリブ海の文学に関心を抱く私にとって、「液／態」というテーマから思い出されたのは、カリブ海世界における「泥」だった。奴隷制の犠牲者たちの遺骨発掘はここ数年人類学的調査の対象になっているようだが、火山性の島嶼地域であるカリブ海では、酸性の土壌によって奴隷たちの遺体は溶解し、ほとんど骨も残らないという。そしてこの「泥」のさらに奥からは、植民地化以前にカリブ海に住んでいたアメランディアンの器物も出土する。言ってみれば、カリブ海において、「泥」は歴史を包み込み、度はずれな時間を抱え込んだものとして重要な意味を持っているのである。そこで常に問われているのは、泥のなかに溶解した、まだ歴史になっていないような何か――溶けてしまい、「熱」としか言えないような何か――である。揺れの後に姿を見せる、忘れられた死者たちのことを思いながら、３つの発表に耳を傾けていた。

4. 運営委員より

発表者および参加者が、縛られず自由に構想することができるお題を考えた結果、いかなる隙間にも変幻自在に侵入可能な「液」というテーマを設定することになった。だがしかし、それは同時に掴みがたく漏れだしやすいテーマであったという点で、登壇者は頭を悩ませたことだろう。そのようななかで、テーマに真摯に向き合い、参加者に「考える種」を蒔いてくださった発表者の皆さん、発表を概括し議論を深化させるように導いてくださった福島さん、準備から当日の運営まで豊かな発想力を持って企画に携わり機敏に行動していただいた運営委員の皆さんには深くお礼を申し上げたい。

孤高の東京暮らしから離れて夏休みを実家で過ごした友人は言う。「実家に帰ったら脳が溶けた」と。引きこもって投稿論文に追われていた友人は、それを書き上げて言う。「論文を力いっぱい書いたら溶けた」と。

もしかしたらわたしたちは、ある固有名を付与された身体という器に、日々、違和感を覚えているのかもしれない。そして、目では見えないある物事の様態を、言葉という目で見えるものに置き換えて表現したいと欲望するのかもしれない。今回、このようなかたちで、言葉としての「液」の態（さま）を見てきたわけだが、自分自身の日常あるいは研究対象の世界に耳を傾け、言葉がどのように様態を変え、表現されているのかを見つめていきたい。（安藤史帆）

運営委員および質疑応答のファシリテーターとして準備を進める中で懸念されたのは、発表者、参加者の多様な関心に基づく本イベントを、いかにして一つの形にまとめることができるだろうかという点であった。発表者にとってできるだけ制限が少なくそれぞれの関心を引き出せる題材を運営委員で構想した結果、「液／態」というテーマにたどり着いたが、そのテーマ設定の自由さがどのような帰結をもたらすのか、準備段階でははっきりとしなかった。

だが、そのような懸念は大きく裏切られた。発表者の「液／態」の解釈はそれぞれ極めてオリジナルなものであったと同時に、主体の揺らぎという同一の問題意識を共有していることが質疑応答において明らかとなった。さらにコメンテーターの福島さんから「主体が解体された後、そこには何があるのか」という質問が投げかけられ、発表者それぞれの異なる切り口から出発したイベント内容は、一つの有機的な議論へと発展していった。

本イベントを通じて、言語態という枠組みの自由さと、個々の研究を結ぶゆるやかな繋がりの存在を確認することができた。言語テクストに一人向き合う研究生活は得てして孤独なものとなりがちだが、今回の交流会は、院生それぞれの研究の間にある透過性のようなものを実感する契機となった。長い準備期間から発表本番まで尽力してくださり、イベントを成功に導いてくださった発表者の皆さん、福島さん、そして運営委員の皆さんに心より感謝したい。（岡本佳奈）

ベッドから目覚めて顔を洗い、歯を磨き、コーヒーを淹れるためにお湯を沸かし、花に水をやり、尿意に促されてトイレにこもって排泄をして、夜には浴槽で湯に身を浸す…。ありふれた日常生活を振り返ると、わたしたちが自分の身体の内と外にある―あるいは外から内へ、内から外へと流れ込む―「液体」と多様な仕方で関わり合っていることに気づく。そうした些末で日常的で身体的な事実を、言語により織られたテクストを対象とする批評や研究の出発点として据えてみたときに何が見えるのか。

運営委員としてイベントの運営に携わりながら「液／態」というテーマについて考えたとき、こうした個人的な問いを抱くと同時に、多様な関心を持つ登壇者からどのような応答が示されるのか期待と不安を抱きながらイベント当日を迎えた。結果的に、この言葉遊びのようなテーマから各々異なる仕方で触発された発表者の皆さんによって、ベケット、津島、ブランショについての豊かな読解が提示された。さらに同時に、多様な方面に向けて拡散していく議論の流れを堰き止めることなく整流する福島さんによる見事な講評によって、身体的かつ精神的に領域確定された自律的存在としての「主体」に対する問題提起という共通の関心も浮かび上がった。

本イベントを終えたのちに、参加者各人がそれぞれの仕方で考えていく問いという種が蒔かれたと同時に、その種を滋養する糧＝水も与えられたことだろう。その水から育つものは個別的で差異化されたものであるように見えながらも、土深く埋もれた根の部分で滋養を与えあうのかもしれない。各人の個別的な関心と潜在的で緩やかな紐帯が示された本イベントは、「根」のつながりとでもいえるような、研究の共同らし

からぬ共同性を実感させてくれるイベントであったように思う。イベントに向けて尽力してくださった発表者の皆さん、福島さん、運営委員の皆さんに心より感謝したい。（西脇智也）

研究会のポスターデザインを検討しているなか、テーマがあまりにも日常的・普遍的であるがゆえに、どこから手をつければよいのかと思案した。水を手で掴むことができないように、このテーマも掴みどころがない…と、おそらくは発表者の方々も同じような印象を抱いたことだろう。だが、どの発表者も主題を素晴らしい内容へと昇華してくれ、たいへん面白い会になった。まずは発表者の皆さんに感謝を申し上げたい。

議論が最終的にどのような絵を描くことになるのか、当初は誰にも予想することができなかったが、終わってみればとても均整のとれたものができあがっていたように思う。これには発表者の皆さんの力量はもちろんのこと、福島さんが全体のバランスを整えてくれたおかげであるところが大きい。福島さんにも感謝を申し上げる。

私としては、ポスターデザイン時には謎めいたままだった「液/態」というテーマの奥深さを、会を通して強く認識することができた。聴講してくださった方々にとってはどうだっただろうか。ともあれ、ここで出来上がった絵をただ鑑賞するのではなく、今度は「液/態」をインクとして使いこなし、新しい絵を描くために役立てていただけるなら、これほど嬉しいことはない。そういうわけで、第二回研究会もまた、刺激的なテーマ設定と、皆さんの研究を一歩でも進められるような発表が行われることを期待している。最後に改めて、発表者の皆さん、福島さん、そして、会を企画し最後までやり遂げてくれた運営委員の皆さんに、心より感謝を申し上げる。（秋山崚悟）

第1回　言語態研究会　研究交流会

液/態

2022年9月5日　14:00~16:00

・登壇者（すべて言語情報科学専攻）

川島知也（博士課程所属）
魏韻典（博士課程所属）
中田崚太郎（修士課程所属）

・コメンテーター

福島亮（言語情報科学専攻 博士課程所属）

＊本イベントは大学院生が互いの研究について知り、交流を深めるために行われるものです。ご興味のある方は、どなたでもお気軽にご参加いただけます。

＊当日のZOOMリンクはこちら：https://u-tokyo-ac-jp.zoom.us/j/82813062370?pwd=UmdGRWF1VGJrVGFyZklPQ28wZkJSQT09
（ミーティングID: 828 1306 2370 / パスコード: 739044）
（右のQRコードからもご参加いただけます。）

主催：言語態研究会（東京大学 総合文化研究科 言語情報科学専攻）
言語態研究会HP：http://phiz.c.u-tokyo.ac.jp/~gengotai/
連絡先：gengotai@phiz.c.u-tokyo.ac.jp

登壇者情報・発表タイトル

川島知也（博士課程2年）
研究テーマ：サミュエル・ベケット
発表タイトル：『名づけえぬもの』における人称・数・態

魏韻典（博士課程1年）
研究テーマ：日本文学、台湾文学、フェミニズム
発表タイトル：関係性の修復に向かって—『あまりに野蛮な』における応答と連帯のネットワーク

中田崚太郎（修士課程2年）
研究テーマ：フランス現代思想、モーリス・ブランショ
発表タイトル：非人称という態—モーリス・ブランショを中心に

言語態研究会 会報 第1号
2023年3月31日　発行
著　者　言語態研究会
東京大学大学院 総合文化研究科 言語情報科学専攻
〒153-0041 東京都目黒区駒場3-8-1
電話 03-5454-6376　FAX 03-5454-4329